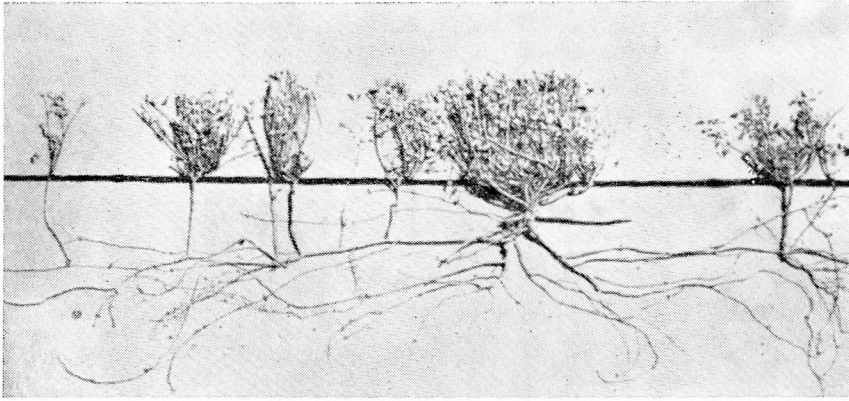


匍匐茎のあるルーサン



まめ科牧草の王として、欧米で最も広く利用されているルーサン(アルファルファ)は、太い直根を深く中に伸ばす多年生の草であるが、最近匍匐性のあるルーサンの品種のことが話題にのぼっている。ルーサンはその直立する草姿から主として刈草用として栽培され、乾草の材料となっているが、同時にその再生の早いことから、放牧草としても活用される。この際、ルーサンが匍匐性を持って蔓延するならば、均一な植生を求め、放牧に耐えるために好都合と考えられる。

アメリカの農業技術研究所(ARS)及びペンシルバニアの研究者達は、このルーサンの中で匍匐性を持つ系統があり、その匍匐茎で蔓延する習性が、日長時間と地上の植物の生育量により左右されることを発見した。

この匍匐性をもっているルーサンは、横に広がる根に沿って不規則な間隔で、芽を出す。この芽は伸びて、それぞれ新しい個体となる。そして条件がよいと、一年間に数フィートの広さに蔓延をする。この匍匐性を有するルーサンは普通のルーサンに替わる目的ではなく、早魃に対する抵抗力が

あり、また同時に冬から春にかけて栽培地の表土が凍結したり、とけたりすることによって、ルーサンの根が持ちあげられて切れたりするような寒地での利用、更にはルーサンを放牧に利用する地帯での要望に応じて育成されているものである。

圃場試験の結果では、この匍匐性を有するルーサンは秋播の場合、春播の場合より匍匐根から多くの個体が発生した。すなわち、秋のように日長時間が短いことが地上部の生長を抑制し、地上部の生育が短いほど匍匐する根から新しい芽が発生した。つまり地上部が急速に生長することは、根からの発芽を阻げると考えられる。

従ってこの試験の結果から、この匍匐する性質は地方によって異なると考えられるので、その地帯に適する匍匐型のルーサン品種を育成する場合は、日長時間を当然考慮に入れなければならない。米国の研究者達は、この特性をもったルーサンを素材として、更に生育の旺盛な、そして多収な匍匐性ルーサンを完成しようと努力を続けているそうである。

他面、既に市販されている匍匐性のルーサンがある。これはカナダのグリテッシュ・コロンビア大学で育成されたもので、北欧に自生している黄色花のルーサン *Medicago falcata* と、雑色花の耐寒性品種グリームとの交雑種から六代に亘って選抜を続けて育成したもので、ライゾーマと呼ばれる。ライゾーマは両親の血をうけて、非常に耐寒性がつよく、細菌性萎縮病には犯されるが、グリーム以上の多収性をもつと言

われる。カナダでは匍匐性を示しているようだが、日本では匍匐性を示したという報告はない。このことは前記のテストの結果から日長時間の影響かとも想像されるが、日本の立地条件下で調査をして見なければなるまい。しかし、ライゾーマ(またはリゾーマ)は、匍匐性の有無はともかく、北海道及び九州における栽培試験の結果では、いずれも初期の生産はやや低いながら、三年目以降の生産は他の系統に比して多く、五、六年間に於ける合計収量は上位に属すると判断され、永年利用のルーサンとして、前述の匍匐性の調査と共に今後注目し値いする新系統と考えられる。

(アグリカルチュラル・リサーチ誌より)

